「底が突き抜けた」時代の歩き方 482

日本では人質事件はどうして、「個人の逸脱」として家族バッシングを誘発するのか

橋田信介と小川功太郎のイラクでの殺害事件に対しては、日本の世間は全くバッシングを浴びせなかった。その理由として、彼らが最初の日本人人質事件と異なって死亡していること、そして彼らの家族、とりわけ橋田氏の妻幸子さんの「覚悟はできていました」といわんばかりの毅然とした振舞い、バッシングなど寄せ付けないような凛とした気丈さ、の二点が挙げられる。もう一つ、橋田氏がファルージャの戦闘の巻き添えを食らって左目を損傷したイラクの少年を日本へ連れ帰って、手術を受けさせようとしていた「美談」がそこに付け加えられるかもしれない。しかし、ジャーナリストとはいえ、橋田氏たちは政府の再三のイラクからの退避勧告を無視して、戦場で銃撃された者たちである。「自業自得」で殺害されて不確かな身代金を税金から支払う負担からは免れているものの、事件の発生によって役人や関係者が動かざるをえなくなる諸経費として、税金から少なからぬ金額が支出されていることは疑問の余地はない。

その税金の負担の上に、同じ日本人として精神的な負担を被ったという被害者感情から、橋田氏たちの家族にバッシングが覆い被さってくることも予想された。少なくとも二カ月前の日本人人質事件で吹き荒れたバッシングの嵐からすれば、それほど声高でなくともバッシングが出てくるのは別に不思議ではなかった。ところが、私のみところ、バッシングに関する記事は皆無であった。いくら家族の態度が立派だったとはいえ、橋田氏たちが危険なイラクへ赴いたことに対するバッシングがあってもおかしくなかった。どうしてバッシングが出てこなかったのか。香田さん殺害事件でもバッシングが起きたことからすれば、橋田さんたちの殺害事件で全くバッシングが起こってこないほうがむしろ不気味であった。バッシングに分別や見境などある筈もなかったらうから、バッシングの自粛自体が変なことであった。

確かにこの殺害事件に対しては、バッシングは自粛したのである。いや、自粛せざるをえなかったのだ。いいかえると、戦意を喪失してしまったのである。それはなぜか。この事件はバッシングに対して、「お呼びじゃない」雰囲気の色濃く漂わせていたからだ。と考えられる。その雰囲気は夫婦、あるいは橋田信介と橋田幸子の二人の物語から醸成されてくるにちがいない。ジャーナリストの高瀬毅が橋田幸子を取材した『アエフ』の記事(05.2.7)のタイトルは、「ラブソングは終わらない」であり、橋田信介との馴れ初めから、結婚後、海外の現場にまで随いて行き、共に危険な戦場を潜り抜けてきた生活についていろいろと彼女から聞きだすなかで、こんな個所が収められている。《血で血を洗う地獄の戦場を何度取材しても、全身を突きさすような恐怖に慣れること

はできない。戦場取材から帰ってきたあとは、無性にイライラした。戦場の凄まじさと、平和な現実との落差を身体と心が受けつけないのだ。幸子も同じことを経験している。

だが、^{ちなまぐさ}血腥い戦場を走りまわってきたあとは、「もうむちゃくちゃ女にもてた」と信介は話していた。戦争の現実など一つも知らないこの国の若者たちが、なにかというところから口走る「フェロモン」が、出っ放しになるらしい。それも強烈な奴！もてまくる男のすることは一つ。でもそれをあっけらかんと幸子に話して聞かせ、幸子も「あっそう」と聞き流した。浮気の一つや二つあったところで自分たちの間はゆるぎないという確信があった。いつも二人でいろいろなことを話し、仕事以外はまるで子どものような信介を、「まったくもう」と、母親のような視線で見つめていた。

「人間ってバカだからさあ」というのが、信介の口癖だった。信介にまっすぐについていった幸子も、その言葉を自分自身に向けているところがある。男と女としてもまったく枯れてはいなかったと、幸子はこれまた正直だ。それだけに信介を失った喪失感はそのごく大きい。》

夜、一人になると、普段の気丈さとは裏腹に^{あら}悲しみを露わにする妻の切なさを記述したあと、こう続ける。

《信介は同志であり、なにより男と女だった。だからこそ最期を^{みと}看取りたかった。

「一緒に死んでもよかったのに。一緒に死にたかったのに。死ぬときは一緒に死のうね、って言っていたのにね……」

事件後、幸子は休む間もなく走り続けてきた。残務整理の合間を縫ってテレビに出演し、取材に応じ、信介が書き残したものをまとめ、自分の本も出した。そんな幸子をずっと横で見えてきたマネジャーの三浦大輔（32）は、「信介さんのことを誰にも書かれたくない、渡したくないと思っているからなんです」と話す。

「そうやって、幸子さんは信介さんへのラブソングを歌っているんです。」

《モハマドの再手術は成功し、イラクへ戻った。あとは基金を元にファルージャに子ども病院を建設する仕事がある。幸子はまだ、信介が亡くなった現場に足を踏み入れている。どんなことがあっても、いつか必ず行くと決めている。行かなければ、生きることに^{どんよく}貪欲だった信介と自分の愛の物語を完結できないからだ。》

以上の記述に垣間見られるような夫婦の「愛の物語」に注目して、精神科医の斎藤環は『ちくま』（04・10）でこう論じる。

《最初に入質となった三人には、その家族の政治性から個人の人格攻撃に至るまで、流行語になりかけた「自己責任」の名のもと、ありとあらゆる非難が集中した。しかし、ほぼ同時期にイラクで射殺されたジャーナリストに対しては、むしろ同情と賞賛の声すら湧き起こったのである。「自己責任」という点において同等のアクシデントであるはずが、ここで非難と賞賛を分けたものは、いったいなんだったのだろうか。

後者にあって前者になかったもの。それは「家族の物語」ではなかったか。

前者の三人に関しては、世間を納得させられるだけの物語が存在しなかった。あるの

は政治的主張のみで、それは「世間」がもっとも忌み嫌うもののひとつだ。ただし断っておくが、世間が嫌うのは「政治」そのものではない。「床屋政談」は世間話の代表みたいなものだ。そうではなくて、「政治的主張」こそが忌避されるのだ。くわえて決定的だったのは、三人とも「独身者」であったということだ。家族を持つ人間が逸脱行為をした場合に比べ、独身者の逸脱に対しては世間の視線ははるかに厳しいものになる。

いっぽう後者のジャーナリストとその家族には、政治的主張が控えめであったことに加え、夫婦愛の物語が存在した。これにイラクの少年に日本で眼の治療を受けさせるためという擬似家族的絆を連想させる美談まで加わっていたのである。前回の人質バッシングからいち早く学習したかのような突っ込みどころのなさ、偶然とは思えないほど完璧なものだった。

むろん、どちらが良い悪いという判断は一概にできない。ただ、このご時世にイラクで活動しようなどという世間的には突出した行為をしようというのなら、とりあえず必要なのは、世間が納得するような「家族の物語」だ。でなければ、ひたすら沈黙を貫く忍耐力だ。「物語」か「沈黙か」。世間を納得させるにはそれしかない。なぜなら世間とは、説得も話し合いも通じない、空気の如き他者なのだから。》

最初の人質事件は人質の三人とも「独身者」であり、「家族の物語」が欠損していたが故に、世間のバッシングを被らざるをえなかった。一方、橋田信介殺害事件では濃密な「家族の物語」が存在することによって、《むしろ同情と賞賛の声すら湧き起こった》と指摘されている。前者は生還したのに、後者は殺害されたという大きな差異も考慮される必要があるだろうが、では「家族の物語」の前では、どうして世間は許容度が大きくなるのか。斎藤氏によれば、《世間はいきなり個人を問題にするのではない。世間はまず、「家族」をこそ、指弾の対象とする》からだ。ここで問題となってくるのは、世間と「個人」との関係であろう。

《日本人には西欧的な意味での「個人」がないという阿部謹也氏の指摘が正しいとして、それでは日本的「個人」はどのように存在するだろうか。私はここにおいて、個人 - 家族 - 世間という系列を仮に考えておきたい。日本的個人はいきなり世間とは対立しない。世間が個人を問題にするときは、ほとんどの場合、「家族」とのセットで問題になる。個人の逸脱は家族の責任という形で問題視されるがゆえに、犯罪者の両親は世間に頭を下げ、あるいは自殺に追い込まれもするのだ。いわゆる「負け犬」に対する世間の視線も同様で、それは家族を持とうとしないこと、「イエの連続性」に加担しようとしなかったことなどに対する非難の視線を含む。》

続いて、《しかしさらに一般的かつ決定的なのは「ひきこもり」に対する視線である》として、「ひきこもり」にこそ、人質バッシングでみられた「個人 - 家族 - 世間という系列」問題がくっきりと浮かび上がっていることを指摘する。

《通常のひきこもり青年は、労働と納税の義務を果たしていないという点を除けば、積極的に悪をなす存在ではない。にもかかわらず、「ひきこもり」に向けられる視線は過

剰なまでに厳しい。それは彼らが、悪や罪とは無縁であるにしても、世間的な価値観に対しては徹底して背を向けてしまっているためだ。働かず、結婚もせず、世間的な行事にも参加せず、およそ世間にとって望ましいと考えられるあらゆる規範に反している。また実際に、ひきこもりの当事者たちも、社会には関心を持ちながら、世間には徹底して反発している。

ここで重要となってくるのは、「ひきこもり」が世間と対立するという点ばかりではない。その対立を複雑な形で媒介するものが「家族」であるということだ。ひきこもり青年を中心として、家族はある時は世間と結託し、またあるときは、ひきこもりのわが子を擁護しようと懸命になる。そして、いずれかの努力もいっそうひきこもり状態を助長するのだ。》

人質バッシングと「ひきこもり」に向けられる視線の厳しさとが重なっているのは、薄々感じ取られていた。要するに、根っこは同じ問題ではないか、ということだ。もちろん、人質バッシングを浴びた三人は「ひきこもり」ではない。それどころか、家を飛び出して国を飛び出して海外の、それも戦場のイラクで果敢に活動しようとする行動家であり、冒険家であるとすらみられる。したがって、三人が人質にならなければ、日本の世間と接触する契機はどこにもなかった。もし三人が人質になってすぐに殺害されていたなら、「自業自得」、「バカな奴ら」のバッシングも一過性の現象であったと思われる。ところが、身代金など解放をめぐる諸経費の負担問題などから、日本国家、すなわち日本国民全体に迷惑を及ぼす「害毒」的な存在とみなされるようになった。いわば、これまで無害な存在であった「ひきこもり」が外に出てなにかをやらかし、世間に大きな迷惑をかける存在と化した感があった。

三人は「ひきこもり」ではなく、むしろその対極に位置づけられさえするが、にもかかわらず「ひきこもり」と同質的な扱いをされているように感じられるのは、「生活の匂い」の希薄さにあったからではなかったか。バッシングの強度は「生活の匂い」の希薄さに比例していたように受けとめられる。「生活の匂い」の希薄さは年齢の低さでもあり、若い年齢順にバッシングはより激しさを増した。三人に続く二人に対するバッシングの強度が三人ほどでもなかったのは、三人に対するバッシングの凄まじさの陰に隠れている格好にあった所為でもあるが、それ以上に「生活の匂い」が三人よりも希薄ではなかったからだと思われる。「生活の匂い」が「家族の物語」や「夫婦愛の物語」と密接に関係していることはいうまでもないが、橋田さんに至っては命を懸けた「生活の匂い」日本人のみならず、現代人の誰もがすっかり失ってしまっている根底的なものを充満させていた点で、バッシングは全く「お呼びじゃなかった」のである。

「生活の匂い」が希薄であるということは、一方では憧れであるが故に、他方では「チャラチャラしている」という猛烈な反撥を招き寄せずにはおこななかった。三人は彼らに関する記事を読めば読むほど、「チャラチャラしている」印象とはほど遠かったけれども、《働かず、結婚もせず、世間的な行事にも参加せず、およそ世間にとって望ましい

と考えられるあらゆる規範に反している》ひきこもり青年と同様に、「生活の匂い」が希薄であるという点で「チャラチャラしている」とみなされ、好き勝手なことをしている連中になぜ自分たちが巻き込まれなくてはならないのか、という被害感情がどっと湧き上がってくるのは避けられなかった。

斎藤環の考察で注意を促されるのは、《阿部謹也氏の講演録「世間と差別」によれば、西欧にはこのような世間は存在せず、個人と社会のみが存在するということになる(...)。この理由を簡単に説明するなら、かつての西欧にも世間はあったのだが、キリスト教の影響で「個人」が確立して以降は、世間的価値観が廃れてしまった。日本においては、西欧の影響によって社会のインフラは近代化されたが、いまだに「個人」が確立されていないため、個人の行動は世間的価値観によって支配されたままなのである》という記述であるが、もっとも彼は西欧世界には本当に「世間」が存在せず、《個人と社会と神しか存在しないのであろうか》と疑問を投げかけ、《中世から19世紀に至るまで、ヨーロッパ各地にみられた》「シャリバリ」の風習を挙げる。

《なかばは儀礼的な罰であるという点は異なるが、公的な法のシステムによっては裁くことができない対象への、もうひとつの処罰システムという点においては、シャリバリは日本の「世間」と同じ機能を果たしているようにも思われる。とりわけその対象が、罪こそ犯してはいないものの、世間的に不適切な状態の家族である点は、当然のようである。奇妙な一致とみるべきではないだろうか。そう、世間はいきなり個人を問題にするのではない。世間はまず、「家族」をこそ、指弾の対象とするのではなかったか。》そう述べながらも、やはり《日本人には西欧的な意味での「個人」がないという阿部謹也氏の指摘が正しい》というのは、西欧的「個人」のありかたと日本的「個人」のありかたとの大きな隔絶を感じているからである。一言でいえば、西欧的「個人」は家族に包摂されていないのに対して、日本的「個人」は家族に包摂されている、ということかもしれない。

日本では個人の逸脱が個人の逸脱として個人の責任というかたちで問題視されずに、家族の責任というかたちで問題視されるのは、個人の逸脱に対する責任は個人で背負いきれないと考えられているからであり、個人で背負いきれない部分は家族が背負う以外にないと思われている。法はもちろん、個人に責任を負わずことになるけれども、個人が背負いきれない部分に対する責任は世間が家族に負わせるのである。しかし、西欧では個人の逸脱に対する責任は懲役150年というかたちで、たとえ個人が背負いきれない罰であっても、個人が背負うほかないと考えられている。個人以外のどこにも責任を背負う場所はありませんと考えられているから、個人の逸脱に対する責任は個人で背負う以外にない。そうであるなら、個人で背負いきれない責任などという発想そのものが忍びよる余地はない。どこまでも個人の逸脱は個人の問題にほかならないのである。

ところが、日本的「個人」はそうではない。個人の逸脱に対する責任は個人と、その個人を育ててきた家族に分割され、法は個人の責任を追及して裁き、法が関与しない家族の責任のほうは世間が追求して裁くのだ。したがって、西欧では個人の逸脱に対して

法の個人に対する裁きしか存在しないのに、日本では更に世間の家族に対する裁きが伸し掛かってくることによって、二重の裁きが存在しているといえる。その根本的な相違が、個人は個人のところに還っていくしかない西欧では考えられているのに対して、日本では個人は家族のところに還っていくしかないと考えられていることにあるのがわかる。そうすると、個人は個人のところに還っていくしかないのであれば、「ひきこもり」が西欧では発生する余地がそもそもないことに気づく。つまり、個人であることと家族の一員であることは両立しないのであり、個人であるときは家族の外に、家族の中にあるときは個人としてではなく、家族の一員として振舞っていることになる。

個人の逸脱は日本では家族の逸脱としてもみなされることによって、《犯罪者の両親は世間に頭を下げ、あるいは自殺に追い込まれもするのだ》。個人はつねに家族のなかに埋め込まれているならば、個人が家族のなかに逃げ込めない西欧と異なって、日本では個人が家族のなかに逃げ込む場所を予め用意しているということだ。したがって、社会のなかに家族が貼り付いた個人として出て行くことは、社会のなかに出ていくことを拒む場所が家族のなかに用意されたまま出ていくことなのである。このことは、「ひきこもり」とは社会のなかに出ていくことを拒む現象としてみるよりも、社会のなかに出て行くか行かないかにかかわらず、個人が家族のなかに埋め込まれている状態にあることを意味する筈だ。「ひきこもり」の目にみえるかたちを取らなくとも、個人に家族が貼り付いている日本では、つねに家族のなかにひきこまったまま社会のなかに出ているということになるかもしれない。

斎藤環が指摘する、日本で大きく浮き彫りにされた「個人 - 家族 - 世間という系列」問題は、他国での人質事件ではどうであったのか。興味深かったのは、日本と同様に「ひきこもり」が増大している隣国韓国での人質殺害事件に対する社会の反応である。日本の最初の人質事件からほぼ二カ月半後、福田さん殺害事件からほぼ一ヵ月後の04年6月22日、カタールの衛星テレビ局アルジャジーラによって、イラクの武装グループに拉致されていた韓国人・金鮮一キム・ソンイルが首を切断され、殺害されたと報じられた。堪能なアラビア語を買われて、昨年6月からイラクの米軍基地に物資を納める韓国の貿易会社の通訳として働いていたが、6月17日、ファルージャ付近で拉致された。実行犯は、「我々の土地から韓国軍が撤退し、新たな部隊を送らないことを要求する。これが実行されない場合は、この韓国人の首をお前たちに送る」という声明を発表すると共に、アルジャジーラに人質のビデオを届けた。

そのビデオに映しだされている武装グループの前で「僕は死にたくない」と泣き叫ぶ金さんの姿はテレビで何度も放映されて、韓国民に大きなショックを与えた。釜山に住む父親が「大統領にお願いしたい。あなたは国民の父であり、母でもあります。韓国民である私の息子の命を救うため、韓国軍をイラクから撤退させてほしい」と訴えたのに対し、盧武鉉ノム・ヒョソフ大統領は「胸の張り裂ける思いだ。しかし、脅しに屈するわけにはいかない。国際社会と協調しながら、断固、テロとの戦いを進めていく」と述べ、実行犯たち

の要求をはねつけた。そして韓国軍撤退期限が切れた直後の22日、金さんの遺体が発見され、その夜届けられたビデオには残忍な金さんの殺害シーンと、「我々は警告したが、韓国はそれを無視した。お前達が個々にいる目的はイラクのためでなく、米国のためだ」というメッセージが収められていた。

殺害事件後の韓国の様子について、『週刊ポスト』(04・7・9)はこうレポートしている。

《路上を埋め尽くした人々の手には蠟燭ろうそく。そして永い黙祷……。数千人規模に膨れ上がったデモは、怒りと沈黙で、異様な光景だった。

23日夜、韓国・釜山。イラクで人質となり殺害された韓国人・キム・ソンイル金鮮一氏の地元で行なわれた、金氏追悼集会の様子である。

殺害された金氏は33歳。イラクで米軍に食材や衣料品などを納入している韓国企業の社員、つまり民間人であった。イラクの武装グループに人質として捕えられていた金氏が、「首切断」という残酷な手法で殺害されたニュースは、瞬く間に韓国全土を覆い、「イラク派兵を撤回せよ」「韓米同盟を破棄せよ」……、と`怒りと悲しみ`のデモが、わき上がったのである。

ニュースの大きさもさることながら、金氏の遺族が人目もはばからず泣き叫ぶ姿が韓国国民に与えた衝撃も大きかった。

「こんなことってあるの？ 息子が殺害の危機に直面しているのに政府は追加派兵方針を発表した。息子は政府に殺されたんだわ」(母・申英子シンヨンジャさん)

両親はショックで倒れ、釜山市内の診療院に移される。そこには祭壇が設けられ、色とりどりの生花が供えられた。その中心で、角帽姿の金氏の遺影が、静かに微笑む。大挙して押し寄せる報道陣を収容するために、急遽、診療院内にはプレスルームも設置され、悲しみに暮れる遺族の様子の一部始終が韓国全土に中継された。

金氏を殺害した武装グループは、韓国軍のイラクからの撤退と、追加派兵の廃止を要求していた。折しも、韓国政府は18日、イラク北部のクルド人自治区アルビルに、約3000人を追加派兵することを正式に決めただけである。現在派遣されている第1次派遣部隊と合わせて、3600人あまり。米英に次ぐ規模のイラク派兵が実現することになっている。

韓国全土で起こっているイラク派兵反対集会。だがその反面、インタ-ネット上では「もっと派兵して、イラクを殲滅させるべきだ」「イラクに復讐するべきだ」といった過激な意見も出て、むしろ派兵賛成派が増えているのだという。

ムヒョン盧武鉉大統領は、「テロには屈しない」として、追加派兵を予定通り行なうことを発表。8月初旬の先発隊900人を皮切りに、順次、現地入りする予定だ。》

レポートは続いて、《まだまだ過熱しそうな韓国のイラク派兵論争。だが、もし同様のことが日本人に起こったらどうなるのか。決して隣の国のことと、傍観しているわけにはいかない》と締め括っているが、この4カ月後には香田証生さん殺害事件が起こって

いる。この韓国人殺害事件を傍観せず、日本人はどのような教訓を学んで香田さん事件に生かしたというのであろう。大阪市大教授の朴一も『論座』(04・9)で、韓国での光景をこう伝えている。

《だが、金鮮一さんの殺害事件を契機に、派兵見直しを求める動きも広がりを見せている。与野党の議員50人が追加派兵の撤回決議案を国会に提出したのを皮切りに、市民団体による派兵反対集会が活発化するようになった。

6月26日には、韓国全土11の都市で、殺害された金鮮一さんを追悼する大規模なろうそく集会が開かれた。ソウルの光化門で開かれた「故金鮮一氏追悼大会」には、キャンドルを手にした1万5千人を超える市民が参加し、最後まで救いを求めたが叶わなかった金さんの無念の死を悼んだ。

参加者からは、韓国軍のイラクへの追加派兵に疑問を投げかける発言が相次いだ。その一人、民主労総の李秀浩委員長は「金鮮一さんの死を無駄にしないためにも、国民全員が立ち上がり、派兵を撤回させて戦争を終わらせよう」と訴えた。

同じ日、金鮮一さんの故郷である釜山でも追悼集会が行われ、イラクから戻った金さんの遺体が安置された釜山医療院まで大規模な平和行進が行われた。追悼の辞を述べた「釜山市民行動」の金ヨンファン代表は「金鮮一さんの死は、韓国の若者を死地にいかせてはならないことを我々に教えてくれた」と改めて派兵に反対していくことを宣言した。》

『週刊ポスト』の記事と同様、テロリストへの憎悪を剥き出しにした強硬意見も数多く寄せられていることを記した上で、《こうした意見は極端にしても、東亜日報が4月時点で行った世論調査では、イラク追加派兵への反対が50.2%で、賛成の31.4%を上回っていたが、金さんが殺害された後に行われた世論調査では、追加派兵への賛成が54.3%で、反対の36.7%を上回った(『東亜日報』2004年7月4日)。殺害事件でかえって追加派兵賛成が急増した格好だ》と、世論の移り変わりに目配せしながらも、《しかし、世論が追加派兵論に大きく傾いているともいえない。多くの世論調査から判ることは、イラクへの派兵問題をめぐって韓国世論が分裂していることであると報告している。

盧大統領の支持基盤は本来、イラク派兵に反対する市民層であり、おそらく盧大統領も本心ではイラク派兵撤退を考えているだろうが、在韓米軍兵士による犯罪に対して反米意識を募らせている国民感情にもかかわらず、北朝鮮問題をめぐる朝鮮半島の緊張と、在韓米軍の縮小問題(05年までに在韓米軍の3分の1に当たる1万2500人を削減する米国の方針)が大きく韓国に申し掛かっているために、自国民殺害事件を機に韓国軍撤退や追加派兵の中止を独自に決定する余地は、日本以上に閉ざされているといえよう。だから朴氏もこう指摘する。

《「自主国防」を宣言した盧大統領にとって、米軍撤退は自ら蒔いた種といえるが、これほど早く米軍の大幅削減案が実施されると想定していなかったことは誤算だった。盧大統領としては、安全脅威を軽減するため、なんとか米軍撤退後の補完体制が整うまで

米軍に踏みとどまってもらえない。盧大統領が、自らの支持勢力の反発に理解を示しながらも、米英に次ぐ大規模なイラク派兵に応じたのは、イラクの民主化のためでもなく、国際社会との約束でもない。ひとえに米国からの信頼を回復し、冷えきった韓米関係を修復するためである。

世論の6割がイラクへの追加派兵を支持したのも、安全保障面で韓国が米国から見捨てられることを、多くの国民が恐れたためであると考えられる。韓国の太陽政策によって南北の和解が進み、北朝鮮を敵国としてイメージすることがなくなったとはいえ、韓国が米国の核の傘の下にとどまることを望んでいる国民は少なくないからだ(李淑鍾「韓米同盟の次の青写真が求められている」『中央公論』2003年6月号)。彼らは、米国との同盟関係がこのまま崩れていくと、韓国のカントリーリスクが高まり、外国資本が韓国から撤退することを何よりも恐れている。米国と同盟関係を維持していくことは安全保障面だけでなく、韓国経済の安定にとって不可欠というのが、韓国における保守グループの一致した考えだ。在韓米軍の削減によって煽られた経済不安心理も、大統領の苦渋の決断を後押ししているといえるだろう。

韓国がイラクへの追加派兵に応じざるをえない理由はそれだけではない。6者協議の場で米朝の仲介役として何としても成果を出さねばならない韓国としては、北朝鮮のみならず米国からも譲歩を引き出さなければならない。そのためには、良好な韓米関係を演出していく必要がある。韓国にとって、6者協議の破綻は、朝鮮半島の危機に直結する最悪のシナリオであるからだ。》

韓国の直面している苦渋が自国民殺害事件を機に増幅しているのがひしひしと感じられるが、我々の関心は韓国の「世間」が人質事件にどのように反応したのか、という点に向けられている。つまり、日本にみられた人質バッシングがあったのかどうか、ということだ。以上の報告によれば、人質バッシングはなかった。殺害前に父親が「韓国軍をイラクから撤退させてほしい」と訴え、殺害後に母親が「息子は政府に殺されたんだわ」と泣き叫んでも、家族バッシングはみられなかった。派兵反対論者はますます氣勢を揚げたし、インターネット上で増大してきた派兵賛成論者にしても、イラクの武装勢力に対する復讐心の強さからであって、日本で噴出した、自衛隊派兵の国策に民間人が異を唱えるのはなにごとか、とか、危険なところに勝手に行って人質になっただけ、という迷惑論や自己責任論は聞かれなかった。6・27付毎日の「余録」はこう書いている。

《バグダッドでは、韓国人連合教会に所属して活動していた。人質になった金さんはビデオの中で「韓国はイラクに派兵するな」と言わされた。だが、それが本心でもあったろう。一人息子の叫びに、韓国の母親は「政府は派兵をやめろ！」と身もだえして号泣した。ここまでは、あの日本人質事件を思わせる。違うのは世論の反応だ。日本ではインターネットなどで「自己責任論」が噴出した。危機を承知でボランティア活動に行ったのだ、自業自得だ、という人質たたき、家族たたきになった。韓国でも、金さんを救うために韓国軍を撤兵すべきかどうかで世論が割れた。ただし派兵を続けるというほ

うにしても、金さんのような国民を守るためには軍隊がいる、という主張で、勝手にイラクに行った金さんが悪いという日本式の「自己責任論」は、全く出ていないという。》

毎日がこう書いた（他の新聞にもメディアにも日本での「自己責任論」と対比させながら、韓国の人質事件に言及した文章を私は目にしなかった、つまり、避けた）のに対して、曾野綾子は早速7.2付産経の連載コラムで、《多くの日本人の中には確かにこの通りに思ってインターネットでいやがらせのメールを送った人もいただろう。しかし私の周囲の多くの人の意識は違う》として、文意のすり替えを指摘しているが、「余録」は多くの日本人が人質バッシングに乗ったことを念頭に置いて書いており、彼女の周囲の人々の意識を考慮してはなかったから、因縁を付けているのは彼女のほうとしかいいようがない。少なくとも彼女が人質バッシングに乗ったことは紛れもない事実なのである。さて、問題はもっと先にある。人質バッシングを惹き起こす日本的「個人」は韓国的「個人」とも異なり、韓国的「個人」は西欧的「個人」と近接しているのだろうか、人質バッシングにみられる日本的「個人」は近隣国にも見出されないほどの、隔絶した異質なありかたであるのか、ということだ。

人質になった韓国人が職業人でなく、「生活の匂い」が希薄なボランティアであったとしても、韓国では人質バッシングは起きなかったであろうと推測される。もし韓国的「個人」が西欧的「個人」により近いとするなら、西欧には存在しない（断定できないが）「ひきこもり」が韓国でも増大しているのは、どうしてだろう。人質事件に対する韓国人の反応の中で唯一異質さが認められる、人質殺害への復讐のための派兵増大論と韓国の「ひきこもり」とはどこかで呼応しているのだろうか。いずれにしろ、韓国では西欧と同様に、人質になったことは、「個人の逸脱」として取り扱われなかった。だからバッシングも起こらなかった。どうして日本では人質になったことを「個人の逸脱」として捉えるのか、という疑問がやはりここで大きく浮かび上がってくる。

韓国の人質以上に「生活の匂い」を固着させていたのがフィリピンの人質であって、その「生活の匂い」を最優先させてイラク撤兵に踏み切ったのが、フィリピンのアロヨ大統領である。7月7日に人質の映像がアルジャジーラで放映され、7月末までにフィリピン軍の全面撤退がなければ人質を殺害するという武装勢力の要求に応じて、アロヨ大統領は19日までに51人のフィリピン軍全員を撤退させたために、人質は解放された。もともと政府は駐留期限の8月20日までにフィリピン軍を引き上げる方針を表明しており、それが人質事件によって一カ月前倒しになっただけという見方もなされるが、テロに屈した撤退であると米国からの批判を招いた。「スペインやいくつかのラテンアメリカの国々もイラクから撤退した。そうすることが最善であると判断してのそれぞれの主権行使であり、そうした権利はどの国も持っている。しかし、彼らの決定は、アロヨの決定とは違い、テロリストの要求に屈して行ったものではなかった」（ニューヨーク・タイムズ紙・社説）

武装勢力の要求に屈した最初の前例となることによって、彼らの拉致作戦がますます

エスカレートし、軍隊派遣国に憂慮すべき事態をもたらすという批判であったが、フィリピンには「出稼ぎ社会」という特殊事情があった。人質になった運転手（４６）は８人の子供を養育するために、これまで三度にわたってサウジアラビアに出稼ぎしており、今回のイラク行きも子供の眼病の治療費稼ぎのために、サウジアラビアでの稼ぎの４倍に当たる４千ドルの月給に引かれて、米軍に雇われたのである。こうした出稼ぎフィリピン人はイラクだけでも４千人にのぼり、中東全体では１００万人もいる。海外出稼ぎ労働者は８００万人以上といわれ、国民のほぼ１０％に相当し、年間、約８０億ドルにのぼる彼らの本国送金金額は国民総所得の１０％以上を占めている。このような現実に立って、アロヨ大統領は５月の大統領選で「海外労働者の保護」を公約に掲げ、今回の撤退に関して、「海外労働者を守ることが重要な国益だ」と述べたのである。

したがって、人質事件で撤退を最も強く主張したのはこれらの出稼ぎ労働者であり、彼らの送金で生計を立てる家族、親族だった。軍の撤退が米国との関係を悪化させることが確実であるにもかかわらず、アロヨ大統領からすれば、一人の人質の背後に連なっている８００万人もの出稼ぎ労働者を切って捨てることなど、到底できない選択であった。危険なイラクに職を求めなくともよいだけの雇用をフィリピン国内に用意できていないのであれば、政府にせめてできることは「海外労働者の保護」以外にありえなかった。そのような国では人質事件に対してバッシングが起こる筈もなかった。いいかえると、ボランティアや取材目的などではなく、国内に職がないために危険であろうとも、生活のために海外に止むなく職を求めざるをえないという現実の下で、どこで働いていようともフィリピン国民として祖国とつながっているという紐帯は、命綱のように存在していたのである。つまり、「国家と国民の物語」がそこでは生きていた。

フィリピンの人質事件の二ヵ月後の９月２８日に解放された二人のイタリア人女性に対して、与党政治家の一部が「政府にきちんと感謝すべきだ」と非難を浴びせたり、日本人人質事件と同様に、「日本でも議論されたように、帰国費用を本人に支払わせればいいのだ」と怒りをぶちまける与党議員たちもいたことが報道されていたが、斎藤美奈子は「人質問題にみるパフォーマンスの成熟度」（『婦人公論』０４．１１．２２）の末尾でこう述べていた。

《その記事を読んで「イタリアよ、おまえもか」と一瞬思ったのだけれど、いやいや、そういう問題じゃないんですよ。あらぬ批判をする人は、そりゃどこの国にでもいるさ。問題は、そうした声に政府や市民の大勢がどこまで乗ったか、なのである。

ところで、彼女ら二人がイラクで解放された日、高遠菜穂子さんは、家族を励ますためにローマのトレッタさんの家において、家族とともにこの朗報を聞いたのだそう。といったニュースも日本のメディアは避けていた感あり。国際的に日本の評判を上げてくれる「ありがたい話」だと思っんですけどね、本当は。》

２００５年５月２９日記